

同朋
選書
34

日暮らし正信偈

亀井鑛

目次 ● 日暮らし正信偈

はじめに

「正信偈」はすべての人の依り処／感謝の心とは／「おかげさま」という言葉／お念仏の効能は？／真宗門徒一人もなし

1

〈依経分〉

無量なるいのち

冒頭二句は「正信偈」の根幹／寿命無量 光明無量／コベル君の粉ミル
ク／かいこがまゆを作る／帰命無量寿の裏と表

17

師との出遇い

法蔵とは如来の修行時代の名／我が力及ばず／コベル君とおじさん／罪を母に悔いる／よき師との出遇い

36

智慧の光明

屁にもならぬ光体験／破闇満願の智慧／光のはたらき

53

清浄仏国土への道

浄土の設計仕様書／親殺しの自覚／現生来生の二利益

64

濁世を救う

世の濁り／近代日本の百年

77

煩惱あるまま

早う死んで欲しい／前念命終・後念即生

84

雲の上は晴れ

なくならぬ煩惱／不断煩惱が真宗／鯉節の弁当母子／『歎異抄』も『御文』も

92

横すべりの救い

この私は差別者です／横すべりに超える／差別を超える突破口／妙なこと

109

との好きな人

一番難しい課題

邪見傲慢は私のこと

122

〈依積分〉

仏道伝承の歩み

親鸞聖人の国際性／釈尊の縁起のさとり／お釈迦さまと阿弥陀如来の
関係

128

龍樹菩薩

緒方貞子氏の提言／社長職を追われて／陸路と水道の難易／じゃ、まあ
いいか

137

天親菩薩

二心なく疑いなく／機法二種深信とは／知らず求めざるに／金子みすゞ
の神通力

154

曇鸞大師

不老長寿の仙術／往相・還相のすがた／まわりへの影響感化

173

道綽禪師

最高の教えと最低人間／三不信こそ私の実態

186

善導大師

王舎城の悲劇から／定善・散善できぬ私／信心とは何か

193

源信僧都

唯称仏の深い意味／分裂した二つの私／大悲のはたらき

208

源空聖人

本気で聞かない私／賢善から愚悪へ／一切は身の歴史

220

僧俗共に同心

七高僧と同朋会運動／一人の念仏者の誕生を／斬りすてず包む世界

231

あとがき

はじめに

「正信偈」はすべての人の依り処

私たち真宗門徒にとって、「正信偈」は、仏前のおつとめを通して、生活の一部になっていきます。それが最近では、必ずしもそうといえない部分もありますのは、生活様式が時代とともに変わり、団地やマンションの住宅では、お内仏（仏壇）を置くスペースもないし、古くからの家で、仏壇は仏間にあるけれど、あっても誰もめつたにそこへ座らない、という家庭が増えていくようです。

昔は、毎朝毎晩おつとめでその日が始まり、おつとめで一日が終わる、おつとめがすまないと食事がいただけないという、厳しいしつけの家もずいぶんあったみたいです。

ですから、家中の誰もがおつとめ、「正信偈」は知っていた。

こんな話を聞きました。都会の葬儀屋さんが葬式の依頼を受けて、まず最初に困るのが、その家の宗旨が何宗かということだ、と。お客が自分の家は何宗なのか覚えがない。「親鸞聖人しんらんしょうじんとか道元禪師どうげんぜんじとか日蓮上人にちれんしょうじんとか、宗祖の名を聞いたことありませんか」とたずねても知らないという。宗派別が判らないと葬式の手順が進められない。困ってあれこれの末、「じゃ、キミヨームリヨーつてことを聞いたことありませんか」というと「あ、それなら在所の生家でおばあちゃんがよくやっていた」「あ、だったらお宅は浄土真宗じょうどしんしゅうです」と、真宗門徒もんどうなら、親鸞聖人の名は知らなくても、キミヨームリヨーなら知っている、と話してくれたことがあります。でも、それもやがて通用しなくなるかもしれません。「こんなことではさびしい」と嘆くよりも、「そういう時代の私たちに、どう対応していくか」が、より前向きな、緊急の問題のようです。

「正信偈」というのは、七百五十年前、親鸞聖人が私たちに残してくださいだった、人間が生きる基準の言葉であり、文章であり、またうた（偈）なのです。およそ人間が、人生を生きようとする限り、「どう生きるか」という生きる基準、生き方の依り処を求めない人はいないでしょう。その時その場を行き当たりばったりの、その場かぎりの気紛れで生きている者でない限り、どんな無宗教者、無神論者でも、生き方の基準、依り処は、心の底で求めているはずで、それにびったり答えているのが、「正信偈」なんです。

ですから「正信偈」は、ただ真宗門徒といった狭い枠の中だけの話でない、と私は思っています。すべての人の生きる基本要件が語られてあるんだ、と思います。

そういう「正信偈」を五百年前に、私たちの日常の暮らして、くり返しとなえつづけることで生活の端々にまで練り込み、定着させたのが、本願寺八代蓮如上人れんにしやうじんだったのです。おつとめという勤行形式ごんぎょうを制定して、朝夕、これを皆で読みとなえて、生活の一部にまで溶け込ませてくださった。それから今日まで五百年、真宗門徒はおつとめで正信偈を、親代々身に刻みこんできました。

感謝の心とは

ところが、長い時代の経過とともに、そのおつとめが形だけのものになってしまい、生命の通わぬ抜けがら化してしまっただけです。おつとめだけはしていても、その精神、こころをいただくという点では、まったくうわの空で、「正信偈」のこころ、親鸞聖人の願いは、どこかへ立ち消えてしまっただけということがあります。

以前、私の所属するお寺で、本山同朋会館へ上山研修に出かけました。ご住職以下総勢二十人ほど、二泊三日でプログラム通り進みました。二日目の晩座談会の席で、参加者の一人ではじめて研修にきたという、八十過ぎの古いお店のご隠居さんが、こう発言されました。

「昨日今日、ご本山でお話を聞かせてもらって、この私のこれまで受けとめていた信心が、どうもまちがっているように思えてきた」とおっしゃる。このご老人、子どもの頃から厳しいお父さんのしつけで、朝晩のおつとめが終わらないと食事もさせてもらえないという習慣で、八十過ぎの今日までついぞおつとめを欠かしたことはない、という方なのです。ですから、正信偈なんかはおそらくソラで読めるんでないですか。そういう筋金入りの真宗門徒のご老人が、「自分の信心、まちがっているみたいだ」と気づかされた。

では、どういう信心の受けとめをしているのかとたずねましたら、朝、お内仏に向かいおつとめをしながら、「阿弥陀様あみだご先祖様。どうか今日一日無事平穩に暮らせるよう、お守りください。よろしく願います」と。夕方には「阿弥陀様あみだご先祖様。今日一日、無事平穩でありがとうございました、おかげさまでした。つきましては明日もどうぞよろしく…」と手を合わせているのだという。

どうでしょう。まちがっているんでしょうか。それとも「私もそんな気持ちでおつとめしているんだけど、どこがまちがいなのか…」と、首をかしげられる方もあるかもしれません。

座談会では、じっくり話し合えないから、家へ帰ったら、毎月のお寺の同朋会で皆

と納得のいくまで話しましょうと、それを機会に月例の同朋会にそのご老人も加わって、話し合いました。同朋会というのは、私たちのお寺の場合、昭和三十六年九月に始まって、毎月第三土曜の夜（現在は午後）、二十人くらいの人が集い、ご住職を中心に仏教書などをテキストにして座談中心で、真宗の教えを生活をとおして学ぶ、月例会のことです。そこで、「今日一日無事平穩にお守りください。よろしく頼みます」というのは、言葉づかいはしおらしいけれども、阿弥陀様にまるで自分の都合にあわせて、あれこれ自分の気に入るように注文つけているのと同じではないか。それは功利心の満足、欲望の延長の話でないか。私たち人間の得手勝手なわがまま横着、あてごとのみのおねだりとちがうか、と話し合ったものです。

すると、一人の人がこう言いました。

「私はね、今日一日無事平穩でありがとう、おかげさま、と感謝はします。でもね、明日もどうぞよろしく、これはたしかにおねだりだから、これは絶対にしません。これならいいでしょう」。

「おかげさま」という言葉

どうでしょう。無事に暮らさせてもらった感謝だけなら合格、と言えるんでしょうか。もっともらしく聞こえますが、実は私たちの感謝の心というの、ありようは自分にとって都合のいいことだけを数えあげて、そんなときだけ「おかげさま」「ありがとう」なんて言っただけで感謝しているんですか、と、そんな話も皆でいたしました。

「この年になっても無病息災、お医者の手をわずらわせることなしに、達者でこれた。おかげさま」「わが家の息子も娘も、健康で出来もよくて、いい学校を出させてもらい、いい会社へ入らせてもらい、いいお婿むこさんとご縁をいただいて、かわいい孫もでき、言うことなしのおかげさま」。こんなふうがいいことばかり数え立てて、感謝と言っています。交通事故に遭ったり、ガンの宣告を受けて後一年の寿命なんて言われたら、それをおかげさまなんて言わないし、言えません。私たちの感謝の心、おかげさまは、おおむねいいことばかり数えて感謝している、一方的な功利打こうり算にか

たよっているみたいです。

おかげさまという日本語は、実に深い言葉なんです。「かげ」という言葉がまん中にあって、それは、目に見えない、かげなる力のはたらきのこと。その上に「お」の字をつけ、下に「さま」をつけて押しただく。それが「おかげさま」。

目に見えないかげなる力のはたらきは、あらゆることがそのはたらきで成り立っている。だから当然いいことばかりと限らない、悪いことだって、目に見えないかげなる力のはたらきによって、私の上によってくることもある。それ、当然でしょう。その、目に見えないかげなる力のはたらきによってやってきた、いいこと悪いこと的一切を、選り好みせずに「お」と「さま」をつけておしいただくのが、「おかげさま」という言葉の、本当の用い方なんでしょう。この、目に見えないかげなる力のはたらきのことを、仏教では「他力」とか「如来さまのおはからい」とかいわれているんですよ。ですから、おかげさまというときは、交通事故もガンの宣告も、不景気で商売が立ちゆかなくなるのも、みんな「おかげさま」なんでしょう。

福井県鯖江さばえの念仏詩人、竹部勝之進たけべかつのしんさんの詩に「おかげさま」という詩があります。

病気もおかげさま

死んでいくもおかげさま

おかげさま おかげさま

(詩集『まるはだか』法蔵館)

病気も死ぬのも、みんな目に見えないかげなる力のはたらき、おかげさまなんですよ。本当の意味のおかげさまとはこういうものでしょう。でも、私たちのおかげさま、感謝の心は、病気やけがや、災難、不幸の時には、出てきにくいですね。そういうところに、私たちの常識的、世間的な感謝の心には限界があるようです。

「正信偈」の全部を丸々そらんじて読めるくらい、毎朝毎晩おつとめをしながら、

その「正信偈」で呼びかけてくださっている、親鸞聖人のお心、「正信偈」の精神とはまったくかけ隔^{へだ}たった、あられもない生き方を、私たちははしているんです。上山奉仕された八十過ぎのご老人も同じです。

お念仏の効能は？

もうひとつ、こんな体験が私にあるんです。

ある教区のある組の同朋大会にご縁をいただいた時、参会者の一ご婦人が感話をしてくださいました。それはこんな話です。

——私の家に年頃の娘がおりますが、この娘がしばらく前から何が原因かわからぬまま、急に目が見えなくなり、表を歩くのにも手をとってもらわないと歩けないままになってしまいました。どこのお医者でも、どんな薬でもよくならない。とうとうお医者の方からさじをなげられ、万策尽きた私たちは最後のたのみは家の阿弥陀様のほかにないと、「これからは朝夕阿弥陀様に向かい、おつとめしていこうね」と、毎日母

娘して仏前に手を合わせておりました。そして半年か一年近く経ったある朝、娘が「お母さん、新聞の字が読める」とさげびます。「どれどれ」と新聞をひろげると、見出しの大活字くらいなら読める。「あなた、見えるようになっただよ」と、それから以前にもまして、おつとめに精を出しました。すると、薄皮をはぐようにといいますが、娘の目はめきめき回復し、今では一人で外へも出られるまでになりました。お医者から見放された娘なのに、これ阿弥陀様におつとめさせていただいたたまもの、と私たちは手を合わせております。どうか皆様も私たち母娘といっしょに、大きな声で称^{しょうみやう}名念仏申させていただきましょう——

場内拍手がなりわりました。

私はその後もずっとこのことが念頭から去りませんので、ひと月後に本山で同朋会推進員の全国集会があつて、その時の班別座談会にこの話を持ち出して、皆の意見を聞きました。年に一度全国から二百人の推進員門徒が集まり、十班に分かれて研修するその席上です。すると、二十人中半数の十名が「称名念仏はそのくらいの効能はあ

るはず」と賛成し、中には自分の体験まで披露して、「歯が痛くて眠られず、転げまわっていた時、痛む歯に手を当てて念仏しつづけたら、不思議とたちまち痛みが引いた。だから目だつて見えるようになるだろう」と言う。あと半分の人は「そりやおかしい。それはちがう」と否定されました。

その感話の体験談は、浪花節や芝居にもある壺坂靈験記つばさか霊げんきの、沢市お里さわいちおさとの観音信仰のご利益話の念仏版だ、昔からあったことだともいう。これは目の見えない沢市が、信心深い女房お里と、壺坂寺の観音様に詣でもつ、その帰り路、「自分さえいなければ、若くて美しいお里がもつと幸せになれる。いつそ死のう」とひとり境界をさまよい、谷へ身を投げて倒れているのを、後から探しに来たお里が抱き起こし介抱する時、沢市の目がひらき、月明かりにお里の顔が見えた。「これも日頃の観音様のご利益」と、夫婦して伏し拝む、というのが壺坂靈験記です。感話の母娘は、その念仏版だと、結論が出ません。

そんな時には、阿弥陀様とか観音様に聞きたいというので、観音様ならどうおっしゃるか、皆で話し合ったあげく、観音様は「ノー」とおっしゃるにちがいない、と。「そんな、拜んで祈ってますが見えない目を見るようにしてもらおう。そんなことのできるものはどこにもいないぞ。そんな力をもったものはどこにもいないということ、お前たちにうなずかせるために、阿弥陀如来も私たち脇侍の菩薩も、夜といわず昼といわず呼びかけずめに呼びかけているというのに、お前たちは何というひとり勝手な思い込みをしてくれるか」と、悲しみの表情いっぱい首を横に振っておられるにちがいない。

すると私たちは、「だつて観音様。現にあなたを信仰して、沢市お里は功德くどくをいただいたじゃありませんか。感話の母娘だつて、仏前でおつとめし、念仏して目が見えるようになったじゃありませんか。この事実を、どう説明なさいますか」と、食い下がって反論するでしょう。その時観音様は、

「それはな。見えていた目が見えなくなるのも、逆に見えなかつた目が見えるようになるのも、誰かのせいや誰かのおかげなんかでない。そうならざるを得ない、目に

見えないかげなる力の、無限大のつながりとひろがりのはたらきによって、そうさせられてくるので、誰かのせいでもなければ、誰かのおかげなどではないんだぞ。そのことひとつをわかってくれと願いをかけ、呼びかけて私たちが苦勞しているのに、何という見当はずれな思い違いをしてきているか」とおっしゃられるだろう、というところに落ちつきました。

真宗門徒一人もなし

どうでしょうか。二つの实例、子どもの頃から毎朝毎晩おつとめを欠かしたのではない、八十過ぎのご老人。娘の目が見えなくなり、お医者から見放されて、仏前でおつとめに明け暮れていた母娘二人。ともに、「正信偈」をくり返し書き返し読んでいゝるんです。でも、その生き方には、「正信偈」の真精神、「正信偈」のところが、まったく反映されておりません。どういうことですか。

これが実は、今日の私たち真宗門徒の、いつわりのない実態なのでしょうか。

今から五十年ほど前、真宗大谷派教団から同朋会運動という、信仰運動が始まりました。昭和三十年代後半のことです。そのとき、宗門の人たち皆が申し合わせた呼びかけが、「真宗門徒ただ今一人もなし」という自覚から出発する、ということだったんです。私もその頃ちようど三十歳そこそこで、たまたまお寺のご住職のおすすめで、この同朋会運動にご縁をいただいて、仏法を学ばせていただき、今日までほぼ五十年歩みつづけてまいりました。

「真宗門徒ただ今一人もなし」という、まつぼうしやくせ末法濁世といわれるに相当する、しんじん信心の空洞化、空白状態が、スローガンだけでなく、現前の実態として行き渡っていた、ということがあるんです。そして運動五十年の今日でも、その実情は少しも変わっておらないというほかないのではないですか。

「真宗門徒ただ今一人もなし」の警鐘は、当然「われ一人、真宗門徒にあらず」の自覚につながります。そしてそれは親鸞聖人が「和讃」の中でうたわれた、

浄土真宗に帰すれども